

八尾高百周年記念誌の「剣道部」を抜粋を掲載

剣道部

遥かなり剣道部、不滅なり剣道部

(1)旧中学時代の剣道部員の集いより

出席者 特別参加：加茂新重郎(中43回)

(八尾高同窓会会長)

米谷明尚(中32回) 坂根貞夫(中37回)

竹村和也(中40回) 松本 治(中42回)

松尾真助(中43回) 大野恵介(中46回)

益弘 滋(中46回) 森本一雄(中46回)

辰巳昭雄(中47回) 敬称略

松尾氏より八尾高創立100周年記念誌掲載の為
戦前戦中の剣道部について想いのままを語り合
って欲しい旨の要請と、加茂同窓会会長より記

明治40年代の柔剣道部員（3代中原校長時代）



念誌編纂の現況についての説明、ご挨拶を頂き乾杯の後早速座談に入る。

先ず、米谷、坂根、竹村氏より創立当時の旧校舎の位置や木造平屋の独立一棟の重厚且つ荘厳な感じの昔の道場、並びに当時より朝、電池をもって登校し、稽古が終わると温かい芋おかゆを食べ身体がホカホカして来た頃にみんなが登校して来ると言う寒稽古の話に花が咲く。稽古の思い出話には決まって寒稽古が一番出てくる。

大正から昭和の初めの頃は河合領助、惣津信蔵の二人の先生が所謂剣道の専門家として囑託で居られた。当時から毎週剣道の課目はあったが正課では無く採点も甲、乙、丙で成績の平均点には入らなかった。

その後昭和11年に文部省の指定課目となり柔剣道は正課となって東京高師出の三瀬武文先生（現松山武文氏）が着任され採点も100点方式となり平均点に算入されることになった。

当時の三瀬先生は着任早々5カ年計画を立て、全国的に優勝可能なレベルにまでする事を宣言されそれこそ稽古につぐ稽古で、同僚の和崎先生が居られた天王寺師範へ再々合同稽古、交歓試合に連れて行かれた。又、勉強の面にも厳しく平均点75点以下の者は剣道部を止めよとまで言われた。そしてその言葉通り学力も学年一番

という人達が生まれてきた。所謂文武両道の時代である。そして旧中42回の松本浩主将（故人）の時、松本治、丸山公清（故人）等は5カ年計画の言葉通り関西学院大学主催の全国中等学校剣道優勝大会で見事優勝を成し遂げた。昭和15年9月23日の事である。

「但し全国と言っても全関西全西日本と言うところだったと思う。然し出場校はいずれも剣道の名門校ばかりだった。先生がもう2年でも長く居られたらお言葉どおり本当の全国制覇の域まで達していたかも知れない」松本。

三瀬先生は昭和14年に転校され後任に同じく東京高師出の斎藤民男先生へバトンタッチされている。

昭和の初期より昭和16年位までは各大学や四条畷神社、和歌山の竈山神社、神戸の湊川神社等有名神社主催の剣道大会が開かれ選手は殆ど毎日曜日毎に何処かの大会に出場していた。

「中でも一番印象に残っているのは毎年京都武徳殿で行われた全国大会で、京の三条の橋の畔や吉田山の麓の旅館に宿泊し、旧制三高や吉田山麓辺りの道場で当時同志社高専在学、油の乗り切った竹村先輩等にトコトン絞られ、其の後で先輩に賀茂川辺りの木屋町や新祇園辺りへ連れて行ってもらったことなど今でも最も苦しく最も楽しい思い出の一つとして残っている。あの稽古で自分でも見違えるほど自信が付いた様に思った」松尾。（因に竹村氏は当時全国高専剣道大会に団体優勝をしておられる）

全国的には熊本の齊々巒や兵庫の赤穂中学等はずば抜けて強く、大阪では川上徳蔵先生の居られた豊中中学等が断然強かった。大体各スポーツはラグビーは天王寺、北野、野球は八尾、市岡、水泳は茨木、四条畷といったように府立校が強かった。

吾が剣道部は当時から奈良の畝傍中学とは毎年春秋に交歓試合をしている。重藤校長の前任校であった関係からかも知れないが特に親しくしていた様に思う。それが現在も続いている四校対抗（畝傍、上野、高津、八尾）試合の源流である。

「昔は中学卒業まで式段を貰うものは居なかった。免許状は朝礼時に校長が授与してくれその時木刀も一緒に頂いた」坂根。

朝礼での授与の形式はその後終戦まで続いた。

「そうすると昔の段位は権威があったと言うことですネ」森本。

「そうですネ。よっぽど上手なもので5年生の秋に式段（竹村）卒業の年の春に式段（坂根）が最高だった。4年生で式段を貰ったのは森本君だけということか」坂根。

「確か4年の春式段を貰ったときには5年生で式段の方は居なかった」森本。

「だから学年対抗武道大会でも4年生の私達が5年生の方に全員勝ってしまった」益弘。

「自分も2年上の方との試合で勝ったのを覚えております」大野。

「自分等の43回は卒業までに正規の剣道部員は全員式段を取りました。何しろ一般剣道部員も含めると100名も居りましたから」松尾。

「そうです80名から100人の大所帯ですから万能選手がそろっていました。自分も冬の駅伝（京都の桜井から河内の千早まで楠公駅伝）に借り出されてその時の風邪がもとで身体を壊してしまっただけです」大野。

「八尾小学校で日本剣道型で三瀬先生のお相手をさせられたときの長時間の正座が苦しかったことが未だに忘れられません」竹村。

「正座と言えば狐山の横の砂利小石の運動場で発声練習や忍耐力養成の為、1、2年生は1

時間、3、4年生は2時間ぶっ通しで正座させられたことがありました。今考えると随分酷なことをしたものだと思います。因に私は3時間ぶっ通しで正座しました。終戦間近かのあの時期にそれに耐える精神力がなかったら生きて行けないと思ったからです」森本。

「だからみんながあなたの事を鬼と言った訳だなあー」加茂。

「自分等の時は対外試合に行ったときでも防具を担いで百貨店の食堂で堂々とコーヒーを飲んで帰って来た。もっと楽しんでやっていた」松尾。

「時代背景が違います。私等の時は終戦時の生きるか死ぬかの時でしたから」森本。

「昔はみんな自分から進んで稽古をした。日本剣道型も先生から教わったものではなく私は兄に教えて貰った」坂根。

「そうだ。私も自主的に天王寺武徳殿に通い段外者の時間から有段者の時間までぶっ通して稽古した。強いものに追いつけ追い越せと。若いときの稽古は短時間でもびっくりするほど上達するものです。それから私は3年先輩の坂根さんにトコトン絞られた。奇遇と言うかその先輩と軍隊が同期なのです。久留米の予備士官学校から一緒でした」竹村。

「和歌山の連隊でも二人で優勝戦をやった」坂根。

「連隊の選手、大阪師団の選手、中部軍の選手、いつも坂根さんと一緒でした。他の者が自分だけ「坂根さん」と、さん付けして呼んでいたのを不思議がっていた。さん付けは学校の先輩やからシヤーないがなー」竹村。

「それは本当に良い思い出ですネ」米谷、加茂。

「竹村さん、あなたが剣道をやられた動機は

何ですか」加茂。

「当時陸上の400米リレーの選手をと思っていたのですが後から来るものがどんどん自分の記録を追い越して行くので断念、さりとて野球は出遅れで到底駄目、たまたま剣道大会で13人も勝ち抜いたので剣道に入ったのです」竹村。

「自分は通産省に居たときも有名な名剣要一氏等を母校に連れていったがそんな様にしておればうんと強くなったと思うがね」米谷。

「ところが残念なのは剣道には戦後の断絶の時期があったと言うことです」竹村。

「そうです。こうして戦前戦中の剣道部は私や辰巳さんの時代に終戦という歴史的な幕切れとともに断絶してしまっただけです」森本。

「そうです。正式には私達47回生が5年生の時ですが私等は4年終了で5年生の方と一緒に卒業ということになりましたから」辰巳。

こうして戦後10有余年の歳月は何時の間にか過ぎ去りそして戦後の剣道部復活へという事になるのである。

ここで戦後剣道部復活について少しだけお話をさせて頂きます。森本。

前述の経路を辿って剣道廃止になってから10年～12年位たった頃でしたか。狐山の麓でひ

っそりと竹刀を振っている生徒の姿が目に入ってきました。立派な道場がありながら使わずに運動場の片隅で練習している同好会のメンバーでした。私は早速同期の益弘氏始め同僚、先輩諸氏に呼び掛けそこで八尾校剣道部剣心会が創設され剣道部の復活と道場の返還を求めて学校側と交渉を続けました。極く一部の先生は「剣道廃止、日本刀と係わる剣道は抹殺しよう」と言う進駐軍に同調してか、卓球場として使用している道場をひと時たりとも使用させてはくれませんでした。剣心会としても稽古や防具の寄贈等、現役への援助と並行して根気良く耐え忍んで交渉すること約2年、現役諸君の努力もあってやっと体育会の中の剣道部として晴れて部の存在を認めてもらいましたが、依然として放課後の道場の使用については、前述の先生の執拗なまでの反対で、何時までたってもNOの返事ばかりでした。神聖なる道場に靴を履いたまま上がり込んで練習している卓球部員を見る度に無念の涙を流したものでした。その間剣心会の会長も松尾、米谷、坂根、竹村、森本、兎玉と引き継がれ数年が経ちました。その間にあって肥田耕也(故人)、高垣又太郎、岡部英二の歴代の校長は常に温かく接して下さい、毎月の私達剣心会の会合には決まって校長室を

開放してくださいました。涙が出るほど嬉しかった。

撥ね除ける人も居れば温かく迎えてくれる人も居る。特に高垣校長は自ずからは校長の要職にありながら高齢にも拘らず何時も防具を付けて直接指導して下さいたことは、現役は勿論私達OBにも大きに勇気を奪い起こさせて下さいました。稽古を終えて校長と汲み交わした一杯の酒は本当に美味しかった。

又、剣道部再建の為自主的に遠路老骨に鞭打



昭和20年11月、剣道部解散の記念写真
(竹内先生の防具姿が見える)

ち稽古日は殆ど欠かさず指導して下さった今は亡き元田中学剣道教師竹内二郎先生、このお二人の先生の御尽力とご指導は、剣道部復活に何時の世までも忘れてはならないことと思います。

竹内先生の奥様から『剣一途 律義に生きし花菖蒲』と言う短冊を頂いておりますが、何の飾り気も無く、ひとかけらの代償も求めず、晩年は八尾高剣道部復活、現役選手の上位入賞を念願しつつ、ただひたすら剣の道に生きられた一生であったと思います。

又後に平成5年まで体育教師として剣道の指導に当って頂いた前田良憲先生も高垣校長のお誘いで奉職して頂いたものでした。

この様にして諸先生、幾多の先輩諸氏の経済面、技術面、精神面の支えがあって、やっと現在の八尾高剣道部は戦後復活したのです。

ところで戦後の大阪剣道界で最初に出来た森下仁丹の会社の中の大阪剣道同好会の初代会長に先輩の米谷氏がなられ、他にもできた同じ様な六ツの団体が米谷先輩の提唱で一つにまとまり、大阪剣道連盟となって現在に続いているのです。言い替えれば米谷氏は大阪剣道連盟の創始者でもあります。又従来の主審（表）副審（裏）の二人の審判制より現在の三人制を初めて採用したのも大阪剣道連盟であり、その提唱者も米谷氏なのです。この審判制が大阪剣道連盟より全国に普及して現在に到っているのです。坂根（元大阪剣道連盟理事、全日本学生剣道連盟審判委員、剣道7段教師）。

この様な剣道界の大なる貢献者の他にも、戦時中ラバウルで戦死、二階級特進全軍布令の栄に浴した海軍中佐宮野善治郎氏（中34回）や、近くは平成5年に藍綬褒章受章の榮譽に輝いた現柏原市長の山西敏一氏（中49回）等も若き心

と身体を剣の道で育み磨いて来られた方々です。

剣道部OB、OGはじめ現役の皆様、八尾校剣道部はこの様な紆余曲折、多難な時代も、百折不撓の精神で乗り切り今日に到りました。特筆のような立派な先輩も多く居られます。

《剣道部は遥かなり、剣道部は不滅です》

自信をもってこれからの稽古、これからの人生に取り組んで行こうではありませんか。

■中46回 森本一雄

（2）八尾高剣道部

はじめに

剣道部の歴史について、まとまった記録はない。そこで、戦後の復活から始まる思い出話を通じて当時の出来事を浮かび上がらせることにしたい。

なお戦前からの話について、既に体育OB会10周年記念誌に詳しく掲載されているのでご覧下さい。

剣道部の思い出

昭和34年、高校12期の塩尻君以下数名の有志により自然発生的に剣道同好会が発生したのが戦後剣道部復活の始まりであった。

当時道場は立派であったが、卓球部に使われていたため、狐山の麓や運動場の藤棚の片隅で、放課後の自主稽古に励んでいたものであった。防具もまたそれぞれの諸君が中古のものを探してきては自ら修繕して使用し、それは苦勞の連続であった。

昭和35年の夏、戦前の先輩諸氏の援助で、曲りなりにも第1回目の合宿が出来るようになる。当時母校の大学剣道部に籍を置いていて、参段

になったばかりの小生が、顧問の松川先生や先輩諸氏より、部の監督指導するよう仰せ付かって約一週間の合宿稽古を行なった。教室にゴザを敷いて寝泊りし、持ち寄りの蚊帳の穴からよく蚊が入ってきて難渋したものである。

かような同好会活動が充実するにつれ、昭和36年、晴れて体育会の剣道部として自他共に認められるようになる。高校14期を中心とする部員10数名は、大喜びしてお茶で乾杯したものである。部に昇格したといえども、依然として道場を放課後使うことが出来ず、やむ無く朝稽古にしようという事になり、朝7時に部員全員が暑い日も寒い日も遅刻することなく剣道場に集合した。卓球台を片付けて掃除をし、7時15分から8時迄の稽古に精出したものであった。尚この朝稽古は以後何と11年間続き、近隣に住む現役諸君が毎朝迎えに来てくれた。この朝稽古のおかげで、どのようにコーチをしなければならぬかをよく勉強できた事は勿論、何よりも早起きの習慣と規則正しい生活が出来、50代を過ぎた今でも病気らしい病気をせず、健康で勤務できた。母校大学の剣道部監督をもう20年余りも続けていられる素地を与えてくれたのは、当時の剣道部諸君のおかげと今でも感謝の気持ちで一杯である。

当時の苦勞を共にした諸君らと今でも一杯やる機会を時にもつのであるが、胸襟を開いて話が出来るとは、喜ばしいかぎりである。

■高6期 奥村悦之

「私と剣道」

八尾高を卒業して20年以上経ったが、今も剣道とかかわっている。親子で剣道教室に通い、週に1回、子供の指導かたがた竹刀を振っている。

今でこそ楽しく剣道と付き合っているが、初めて出会った八尾高時代は、苦しい事ばかりで楽しかった思い出は少ない。

当時の私は、虚弱体質であったため、何とか体を鍛えたいと考え剣道部に入部した。人一倍体力には自信のない私であった為、日頃はやさしい先輩方が、練習では全員鬼の面をかぶった悪魔のように思え、1年間は地獄のようでした。手足の皮は、めくれにめくれ、狐山からの発声練習で声はかれにかれ、森進一のようなハスキーな声がしばらく続いた事を覚えている。その頃の剣道場は、女性は一步も足を踏み入れたくないような古ぼけた、汗臭さの染み込んだ道場だった。先輩の言では、床のスプリングが全国で一番良いのだそうです。幸い膝は痛めなかつ

たが、穴のたくさん開いた床に足を踏み込み、切り傷が絶えなかった。

もう一つ鮮明に記憶に残っているのは、合宿の事である。当時は、直接指導してもらえる顧問がいなくて、部員同士で練習し、合宿も部員で計画した。1年生の時は、奈良「柳生の里」正木坂道場で合宿をした。従来、合宿は学校で実施していた。学校でやると、鬼の先輩も恐れるOBの方々が、団体でやって来られると聞き、



昭和48年、OB・現役合同合宿

山奥の正木坂道場を選んだのだった。我々1年生は、少し安心していた。しかし、先輩の話とは大きく異なり、昨年と変わらず、OB方が合宿に参加し、まさに血の池地獄の日々に染まった4日間であった。

2年生の時は、昨年の轍を踏まないよう有名な場所を避け、廃校になった奈良の山奥の体育館を借りて、合宿練習を実施した。それでもOBは、大勢参加して下さり、うれしい悲鳴？を挙げた事が、なつかしく思い出されます。

今、八尾高で剣道をしている現役の方へ一言、どんな形であれ、剣道と末永く付き合って行ってほしいということです。現役当時とは、違った目で剣道を観る事が出来、よりすばらしいものであることに気がつくと思います。

■高25期 中井秀典

私と八尾高剣道部

私は、現在、和歌山の私立高校で教鞭を執る傍ら、剣道部の指導もしております。そのクラブで生徒達を指導するにつけ、いつも考える事は「どうすれば剣道をうまく教えることが出来るのであろうか。」と日々悩んでおります。その時ふっと思い出すのが、八尾高剣道部の3年間です。

私は、中学から剣道を始めた。その中学校は、熱心な顧問の指導により、高校入学時にはえらく剣道のとりこになっていた。

その頃の八尾高剣道部は、監督の前田先生と松永先生が中心となって指導されていた。ところが八尾高剣道部の稽古も、中学時代に負けず劣らずで、例えば入学後、初めての公式戦でチームが負けると、試合場とは別の場所に移り、

延々1時間の「切り返し」。また普段の稽古では、とくに辛い「懸り稽古」と「相懸り」が約30分、これが終わるともうへとへとです。他にも2年生の夏合宿では、洞川で他校との合同練習。5日の内、4日間は、切り返し・懸り稽古・相懸りのみ。この時の辛さは、口では表現出来ない。

しかし、この様な稽古があったからこそ、今の自分の剣道の下地が出来上ったと思う。そして、私の最高の思い出——近畿大会出場を勝ち得たのも、厳しい稽古があったからと思う。私のと言うより、我々36期の時代は、府下大会で数々の入賞に輝きました。

でも今思うことは、八尾高剣道部は決して剣道ばかりやった集団ではなかったと言う事を。我々は、先輩・後輩の分け隔てなく、部員全員が剣道に勉強に、遊びにと積極的に取り組んできた。これは、今も昔も変わらず、八尾高剣道部のモットーではないでしょうか。私立学校とは違う、高校生らしい、何事にも真剣にチャレンジ出来る集団それが八尾高剣道部と言える。

しかし、この様な素晴らしい集団作りの裏には、顧問の先生の御尽力があったのは言うまでもありません。特に、前田先生の御指導には、目を見張るものがある。先生は稽古中、ほとんど何も言わない。御自身の稽古の中で、先生は身をもって部員達に教えて下さるのです。ただ、先生の目の厳しさは、今も私の脳裏に焼きついていきます。

最後になりましたが、この八尾高剣道部は私の誇りです。そして、目指しているクラブの理想像です。まだまだ前田先生には足元にも及びませんが、私の一生の夢として、八尾高剣道部の様にクラブ作りを目指して行きたいと思います。

■高36期 岸本晃和

クラブ活動の思い出

そもそも剣道部に入ろうと思ったきっかけは、真っ白な道着に紺の袴を身につけた先輩方の凛凛しい姿があまりにも新鮮だったからである。中学には剣道部がなかったので、初めて見る剣道部の練習をのぞいた時の印象は今でも頭に焼き付いている。

が、単純に袴に魅せられて剣道部に入った私が、練習について行くのが苦しくて、やめたいと思うまで、たいして時間はかからなかった。私は、毎日毎日もうやめよう、もうやめようと思いつつとうとう3年間やめずに卒業した。

もちろん、生まれて初めて剣道具一式を身につけた時のこと、初めて試合で勝った時のこと、近畿大会に出場出来たこと等、楽しかった思い出もたくさんある。

今、社会に出て何かにつづった時、困った時に思い出すのは、つらくても意味もなく頑張っていた剣道部の時の事だ。どうすればいいんだろうと思った時に、とにかく頑張ろうと思える事は、今の私にとって大変な強みで、未来への自信にもなっている。

高校時代の話に花が咲く時、あの時途中でやめなくて良かったとしみじみ思い、そしてあの頃は良かったなあと、なつかしく感じるのだ。



昭和51年、女子部員も登場

今は竹刀を持つ事もなく、後輩達の頑張っている姿を見るのも1年に数える程だが、どうにか、くじけずに頑張りたいと思う。なぜなら、あんなにいやでやめたくて仕方なかったのに、思い出せば、ほんわかと幸せな気分になれるからである。

■高39期 富村繭美

おわりに

年代は違っても、厳しい稽古、つらい合宿、振り返った時の剣道部のなつかしき、良き指導者と共通するものが見えてくる話だと思う。最後に百周年を機会に、現役部員とOB・OGの新たな発展を期待致します。

■まとめ 高21期 松永強

柔道部

八尾高校創立100周年を迎えて

昭和57年11月21日、柔道部は創立70周年記念式典並びに記念誌を発刊、来賓に塩川正十郎代議士始め校長水本逸郎先生、体育部OB会永田三郎会長他、数十名の方々をお招きし、式典を盛会の内に挙行できました。さらに平成4年11月29日、80周年記念式典を挙行、梶本照夫校長、加茂新重郎同窓会会長はじめ関係各位には物心両面にわたりご支援を賜り御礼申し上げます。さて柔道部の歴史については久野行雄氏(中36回)によると、母校創立明治28年度当初より、90有余年の歴史と伝統を有するのではないかと考えられます。ご案内の様に「柔道」は明治15年師範嘉納治五郎先生(当時23才)が講道館柔道として開講されたのが始まりで、八尾高校歌にうたわ